

そいづ

一日一日をたいせつに



岡田 静江

自然界のすべてが新生の観を呈する
 ような春。このときの新学期は教師に
 とってもまた期待、決意など新たな思
 いがわくときであるが、転任したての
 新任者には多少の不安も加わる。さあ
 どんな毎日が待っているだろうと、
 種々の思いで始業式前のひっそりとし
 た校内のあちこちを巡ってみる。

しかし、始業式、入学式を終え、新
 学期特有の諸行事を経ていくうちに、
 ああやっぱりこれが学校の姿だと感ず
 る。生徒たちのいないときとはなんと
 違うだろう。校内いたる所に若い姿が
 満ちている。職員室では新任の先生
 がたが、忙しそうにしかし活気に満ち
 てキビキビと仕事をしている。周囲に
 活気があり適度の緊張感がある。そん
 な様子を感じ見ているのは気持ちがい

い。
 今年の新学期は特に忙しかったよう
 だ。二年に一度の大きな催しである体
 育芸能祭が、時期を繰り上げて四月中
 に行われたからである。これは体育祭
 と同時に、古くからこの地方に伝わる
 芸能(田植踊り、御神楽、流れ山踊り、
 宝財踊り、剣舞)を練習して披露する
 ものである。当日までに二週間余りし
 かない。この間に生徒たちは、今や地
 域の人々にとってさえ「なつかしいも
 の」となった踊りを覚え、太鼓や横笛
 の奏法を覚え、他に各種の競技の準備
 をするのだ。とにかくこの間は、その
 日一日に予定されたことを消化しきら
 ないと、即、翌日の予定が狂うような
 毎日だった。教師も細かく分かれた各
 部所でそれぞれ準備を進める。学校中

が体育芸能祭をめざして動いた毎日
 だった。

そうして、こうした毎日を積み重ね
 ての芸能祭当日、衣装を整えて踊った
 踊りはどれも華やかだった。前日まで
 失敗を繰り返していた組体操は、当日
 全部成功した。このような姿に若さの
 エネルギーを見たが、それとはまた別
 に、あることが成功するには、それな
 りの過程があり、それは直前までの部
 分部分の積み重ねによるのだと誰もが
 感じたことと思う。目には見えなくとも、
 陰でどれだけ多くの人々が手を尽
 したか。その細かな事が集結し
 てこそ、体育芸能祭は成功したのだっ
 た。

私たち教師は、学校で毎日の生徒た



体育芸能祭「流れ山踊り」

ちとのさまざまなかかわりの中で物を
 考え生活している。一人一人の言葉、
 行動に一喜一憂し、二度と繰り返され
 ることはないことに面しつづつ時を送
 る。これは生徒も同じである。家庭で、
 学校で、彼らなりの種々のかかわりの
 中にある。そしてその彼らの年代は、思
 考や情感が完成に向いつつある時であ
 り、今この毎日の過ごし方が今後の彼
 らの進む方向を決めるといえる時なの
 だ。あたりまえのことだが、これを生
 徒たちも深く考え自覚して欲しい。誰
 もが内面的に豊かになるべく、日々、
 向上心を持ち続けねばならない。

体育芸能祭も終わって落ち着いたこ
 ろ、前任校の生徒たちからの手紙が届
 く。

「先生お元気ですか。新入生を迎え
 て私たちも少しおとなになったような
 気がします。」

こんな文が見える。一人一人の顔が
 浮かび、今の目の前の生徒たちの姿と
 重なる。そうだ、あのころも何もかも
 新しい経験で、生徒たちには頼りなく
 写つただろうが、毎日夢中だった。そ
 してそんな一日一日が今日に、今の自
 分につながっている。そして今日はま
 た明日へ、その光へと続いていく。こ
 の一日一日をたいせつにしなければ
 ……

こんなことを考えながら、今日も生
 徒たちの「おはようございます。」の声
 とともに校内に入る。

(相馬農業高等学校教諭)